

大東文化大学 東洋研究所所報

2018.1 No.68

目次

『今になって気づいたこと』 門脇 廣文……………1
2017年度 公開講座「アジアの民族と文化」
第1回講座概要 小林 春樹……………2

第2回講座概要 原 隆一……………2
第3回講座概要 安保 博史……………3
2018年度 夏休み公開講座（予告）……………4

今になって気づいたこと

大東文化大学 学長 門脇 廣文

私は次の二篇の論考、「陸機〈擬古詩十二首〉考」（第69号 昭和59（1984）年2月）、「陶淵明研究ノート―「読山海経」第一首〈頗廻故人車〉の解釈について―」（第72号 昭和59年7月）を『東洋研究』に掲載していただいています。私が大東文化大学に奉職して二年目のことです。先日、岡崎邦彦所長とお話していて、そのことを思い出しました。

私は昭和58（1983）年の4月に大東文化大学（文学部中国文学科）に奉職することができたのですが、公募の書類が手元に届いたのは同年の1月、正月気分がやっと抜けようとするころでした。現在では考えられないほど遅い時期のことでした。1月に書類を出し、3月3日の教授会で承認され、3月末に仙台から東松山校舎の宿舎（現在はありません）に引っ越しするという、なんとも慌ただしい三ヶ月だったことを覚えています。

私が大学に応募していたとき東洋研究所も研究員を公募していました。私が大東文化大学に東洋研究所という研究機関があることを知ったのは、そのときのことです。東京大学の東洋文化研究所や京都大学の人文科学研究所に相当する研究所が大東文化大学にあることを知り、ぜひその一員になれるような研究者になりたいと思いました。

その機会は、意外にも早い時期に訪れました。大東文化大学文学部中国文学科に籍を置いて一年も経たないうちに、栗原圭介先生から東洋研究所の兼担研究員にならないかと誘われました。いき

なりそのようなお誘いを受け、大いに戸惑いましたし、本当に自分のような者にできるだろうかと不安になりました。しかし、とても光栄なことですので、兼担研究員をさせていただくことにしました。一生懸命に研究



しようと思いました。先生は、論文投稿の機会を与えてやろうと考えて兼担研究員の資格を用意してくださったのだと思います。

それはとても貴重な機会だったのだと、今になって改めてそのように思います。先に挙げた二篇の論考のうち、陸機の「擬古詩」に関する論考は、私の漢詩研究の基礎となるものと言えますし、後者の陶淵明の詩についての論考は、今年の四月に公刊した『洞窟の中の田園』（研文出版）に収録したように、私の陶淵明研究の原点となっているものです。

すでに鬼籍に入られた栗原圭介先生には改めて感謝申し上げなければなりません。若輩者の私に『東洋研究』への投稿の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

(文学部中国文学科教授)

公開講座「アジアの民族と文化」

2017年度（第33回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ81名で、各講座の概要は以下のとおりである。

◇第1回 2017年11月9日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：現代日本に生きる 古代中国の遺産～「年号」、その他を中心として～

講師：小林 春樹（東洋研究所 専任研究員、東洋研究所准教授）

「年号」のはなし

「大化」（後645～650）以後、平成、さらには今上天皇の生前退位にともなって制定されるであろう新「年号」に至る日本のそれらのルーツは、前漢（前206～後8）第六代の武帝（在位 前140～87）の時代^{（きかのぼ）}に遡る。天の神が武帝の治世を称えて降したとされた「鼎」（三本足の青銅の祭器）^{（かなえ（タイ））}の出現をきっかけとして、武帝の即位年（前140年）を「建元元年」、翌年を「建元二年」とし、以後、数年を一単位とする「元」の「名称＝号＝元号」を制定したことに始まる当該制度は、現在では日本のみに残る制度である。ちなみに日本のそれは、「一世一元^{（いっせいいちげん）}の制（一人の天皇が一つの元号を使用する制度）」であり、当該の天皇の崩御もしくは退位後は、その元号を以てそれを称号とする制度としても援用されているが、それらもまた中国の明王朝に始まるものである。以上のように「元号」制度は「中国由来の制度」といえるのである。

「呂律」のはなし

酔った人など発語を「呂律がまわらない」と表現するが、「呂律」の語源は、雅楽など、前近代の日本の音楽の原型にもなった古代中国の音楽用語であり、欧米のC,D,E,F…、日本のハ、ニ、ホ、ヘ…に当たる「12の絶対音高」に当たる「十二律呂」に存する。ちなみに「呂氏春秋^{（りよし しゅんじゅう）}」によればその生成方法は、一方が開口した長さ3寸9分（約9センチ）の竹筒を吹いて「黄鐘」^{（こうしゅう）}を得、それを「三」等「分」してその「一」を「損」じた長さ2



寸6分（約6センチ）の竹筒を吹いて「林鐘」^{（りんしゅう）}を得、さらにそれを「三」等「分」してその「一」を「益」^{（たいそう）}した長さ3寸46分（約8センチ）の竹筒を吹いて「太簇」^{（たいさく）}を得…という操作を繰り返す「三分損益法^{（さんぶんそんえきほう）}」であった。ちなみにピタゴラスが採用した方法の原理も同様であったが、両者には、13回目に得られる1オクターブ上の音高が本来よりも高くなるという欠陥があった。西洋でそれを克服したのは17世紀の数学者シモン・スティヴンの「平均律」であるが、中国においても朱載堉^{（しゆさいいく）}（1536～1611）が、日本でも中根元圭（1662～1733）がそれぞれ同様の成果を達成しており、日中の音楽理論の水準は西洋のそれに比しても遜色はないのである。

◇第2回 2017年11月16日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：ペルシアの伝統技術—沙漠の知恵、カナート・製粉水車・風車—

講師：原 隆一（東洋研究所 兼任研究員、大東文化大学 名誉教授）

私がかつて、フィールドワーク調査（1976年～1978年）の対象としたイラン東部、アフガニスタンと国境を接する山地オアシス村の具体例をスライドで説明する。こんな辺境のオアシス村において、一見、原始的とも思えるような技術装置や仕掛けを詳しく調べると、村の希少な水を平等に分配する社会組織やルールがきめ細かく埋め込まれていることがわかる。村の2本のカナート（地下水路）から流れ出す水は住民の命綱であり、その水は果樹園や耕地を潤し、モスク（イスラム寺院）やハンマーム（共同風呂）に水を供給し、製粉水車のエネルギー源

となり、貯水槽で緊急時の生活用水として利用するなど、希少な資源を上手に使う知恵がみられた。

さらに、山地村のカナート水を利用した製粉水車と、近くの平地村にある製粉風車は、この地方の発明と言われ、沙漠地方の独特の建造物である。

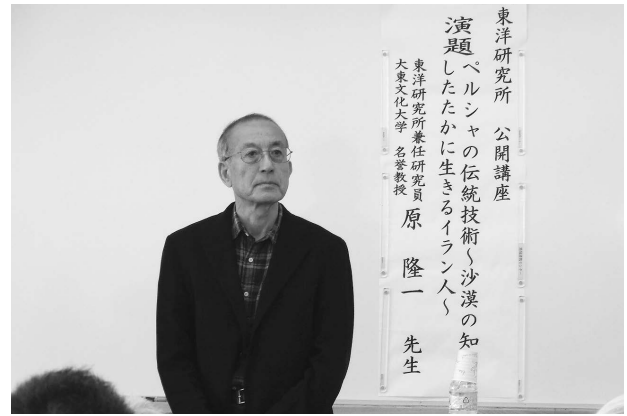
この地の製粉水車は、垂直車軸で水平回転する「垂直軸水平型水車」である。製粉用石臼とは垂直車軸によって上下で直結する仕組みである。

カナート水路から高さ10mほどの落水塔に落とし、底にある噴射口から出た水が横回転する水車羽をまわす仕

組みである。水量より落差に重点を置くこの型の水車は、中近東を起源として、アルプス＝ヒマラヤ造山帯が走る地域、東は中国タクラマカン沙漠南辺のウイグル地方からカラコルム南麓のパキスタン、タジキスタン、アフガニスタン、イラン、トルコ、ルーマニア、ハンガリーまでの山岳地帯に分布している。

他方、この地に独特の製粉風車、「垂直軸水平型風車」がイランとアフガニスタン国境地帯に見られる。小麦の収穫期である9月上旬、中央アジアのキジルクム沙漠からインド洋に吹き抜ける120日の風を利用した、ちょうど都会のホテルの回転ドアのような形をし、回転する風車である。

それは、水の乏しい地方で、一定の吹く風の流れを水の流れにかわるものとして利用した製粉水車の代替物である。連結の風取塔を備え、沙漠の伝統的建造物として、その景観は美しい。



伝統的な生活技術装置を最先端の中規模、適正技術で補いながら、未来のための自然再生エネルギーの装置として復活したり、人類の文化遺産として保存、観光資源として利用する動きに期待したい。

◇第3回 2016年11月23日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：李白伝説と蕪村の文事 (文事：文学上、学問・芸術などに関する事柄)

講師：安保 博史 (東洋研究所 兼任研究員、群馬県立女子大学教授)

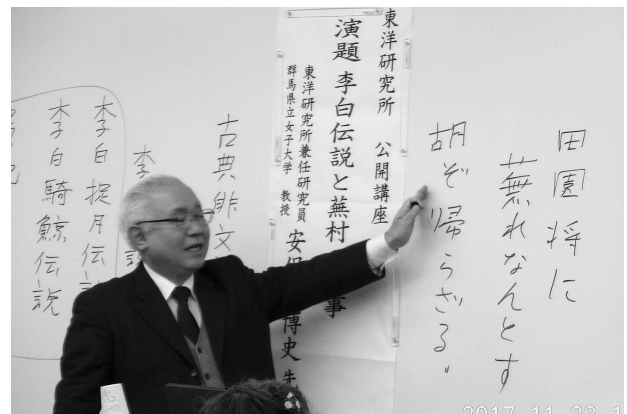
蕪村の俳諧や文人画は、さまざまな李白伝説に基づいて創作されている。例えば、「酒ニ乗ジテ月ヲ捉ヘン」(『唐才子伝』巻二)として湖に死す李白(→李白捉月伝説)、「鯨ニ騎ツテ飛ンデ天ニ上ル」(馬子才「思亭ニ燕ス」(『古文真宝前集』巻五))李白(→李白騎鯨伝説)、「李白一斗百篇/長安市上 酒家ニ眠ル/天子呼ビ来レドモ船ニ上ラズ/自ラ称ス 臣ハ是レ酒中ノ仙ト」(杜甫「飲中八仙歌」(『古文真宝前集』巻八))と描かれた酒仙としての李白(→酔李白伝説)、楊貴妃に墨をすらせ、玄宗皇帝の御前で詠作する李白(→貴妃捧硯伝説)など、枚挙に暇がない。

今回の「アジアの民族と文化」公開講座では、俳系の上で其角に繋がる蕪村グループの李白伝説受容の諸相に触れつつ、彼らの文事の豊穡を楽しむとともに、彼らが〈酔〉〈愚〉なるものに文芸的価値を認めている事実注目し、蕪村の文事の本質を見極めていく。

特に、几董編『続明烏』(安永五年刊)「しづかさや」歌仙の、

酔其角花見の庭に侍坐すらん (大) 魯
一斗百篇英雄の春 執筆

と見える作例が象徴する通り、前句の「酔其角」を、付句で「飲中八仙歌」の詩句「李白一斗百篇」を踏まえて「英雄」と賛美する事実は、〈其角—蕪村—几董〉という俳系上のラインを浮き彫りにしているようで、興味深い。その意味で、几董編『続明烏』に入集する「花火尽て美人は酒に身投げけん」の几董句が、其角編『虚栗』(天和三年刊)入集の「月ヲ見て東坡は雪に身投げ



けん」の才丸句や、「芋を抱て酒に身なげんけふの淵」の桐橋句などと不思議な照応関係を結んでいる事実は、注目に値するのである。「李白伝説と蕪村の文事」公開講座は、この「花火尽て」の几董句についての新解釈を以下の通り提示して、結びとしたい。

李白は月を捉えんと湖水に入水したが、「貴妃捧硯」の故事の通り李白と縁の深い楊貴妃と思しき「美人」は、李白が求めた月ならず、なんと「酒」に身投げして酔いつぶれたのだろう、だから姿を現さないのだ、と「美人」の不在を嘆く体。

いかがだろうか。東アジア文化圏の一隅で、蕪村たちはこんなにも濃密に李白伝説を愛好し、こんなにも愉快的な句を詠んでいたのである。

2018年度 夏休み公開講座

東洋研究所では、秋の公開講座のほかに「中国史入門～歴史教科書の先に見えるもの～」として、夏休み公開講座を予定しております。定員は各日30名（先着順）、受講料は無料です。

日 程	講 師	テーマ
2018年7月下旬の土曜日～8月上旬の土曜日 10:00～11:30 上記のいずれかの日に、3名の講師が開講します。	岡崎 邦彦 教授 （大東文化大学 東洋研究所 専任研究員） 小林 春樹 准教授 （大東文化大学 東洋研究所 専任研究員） 田中 ^{たなか} 良明 ^{よしあきら} 講師 （大東文化大学 東洋研究所 専任研究員）	詳細未定

■会 場：大東文化会館 研修室（詳細は未定）

■交 通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

◆詳細な日程、会場である大東文化会館内研修室番号が決定しましたら、追って公表いたします。

2017年度 東洋研究所刊行物

- ・『東洋研究』 204号（2017年7月発行）
- 205号（2017年12月発行）
- 206号（2018年1月発行）
- 207号（2018年2月発行予定）

- ・『茶譜』巻十 注釈 （東洋研究所研究班編 2018年2月発行予定）
- ・『藝文類聚』巻46 訓讀付索引 （東洋研究所研究班編 2018年2月発行予定）
- ・『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 II ～50年の研究成果と背景～』（全5巻）
（東洋研究所研究班編 2018年2月発行予定）

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL 03-3265-9764

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2
TEL 03-3937-0300

■池上書店（大東文化大学板橋校舎内）

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL 03-3932-7567

■進明堂（大東文化大学東松山校舎内）

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL 0493-34-4430

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.68

2018年1月31日発行

印刷：（株）東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL 03-5399-7351 FAX 03-5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>